

SPECIAL  
ISSUE

観光学部 10周年 記念特集



# 『観光学』第18号 観光学部10周年記念特集に寄せて

和歌山大学観光学部長  
和歌山大学観光学会長

藤田 武 弘

2017年4月、和歌山大学観光学部は創設10周年の節目の年を迎えた。創設以来、和歌山大学が掲げる新しい時代の「観光学」を学ぶべく、旺盛な学習意欲を持った若者達が全国各地から集い、入学後の実践的な教育プログラムによって鍛錬された800名余の卒業生たちが、今やそれぞれの業界で観光学部生としてのアイデンティティを持ちつつ元気に活躍している。設立時からの教員スタッフの一人として、まさに感慨一入である。創設以来、関係者の皆さまから頂戴した私たちへの温かい励ましやご支援に改めて感謝申し上げたい。

21世紀は「観光の時代」と言われ、世界のあらゆる国・地域で最も有望な成長分野として注目を集めるなか、日本国内においても官民一体での「観光立国」実現に向けた政策や取り組みが推進されてきた。そして、観光産業や行政の現場と密接に連携しながら、新しい観光学の創造と合わせて、観光を支えるに相応しい豊かな教養と専門性、さらにはグローバル時代に対応したハイレベルな国際的・学際的視点を備えた観光人材の輩出に対する大学への期待は、創設当初と比較してもより一層高まりをみせているといえよう。

和歌山大学においては、観光学部の教育課程の完成に引き続いて、2011年度には大学院観光学研究科修士課程を、さらに2014年度には大学院観光学研究科博士（後期）課程を設置した。その結果、国立大学としては、学部から大学院博士課程まで一貫した観光学分野に関する教育課程を有する唯一の高等教育機関となった。

そして、2016年度には、「観光経営」・「地域再生」・「観光文化」という3つの基本領域（コース）の相互関係として観光学の学問体系の全体像を認識するというコンセプトを柱に、学部から大学院教育までを通底する融合的・横断的な教育研究体制を構築すべく、学部教育課程を再編成した。その際には、いわゆる「積み上げ型」の体系的な講義科目の履修には馴染まないという観光学の学際性に配慮した各種の実践型教育（PBLなど）の導入による「包括的対応力（ジェネリックスキル）」の獲得が重視されたほか、国際化社会が直面する様々な問題への対応力を涵養するために必要な英語での他文化とのコミュニケーション力を高めるべく、専門科目のすべてが英語による講義で履修可能となる新たな教育課程（グローバル・プログラム）の導入も進められた。

これらの取り組みの過程で、経済学部観光学科開設当初（2007年度）はわずか13名でスタートした専任教員数は現在26名を数えるまでとなり、学部の教育研究環境をサポートするスタッフも拡充された。2016年度には文部科学省「大学

改革に積極的な取り組みを行う大学を重点支援するための国立大学の機能強化」事業への認定を機に、観光学教育研究の更なる高度化・国際化を支援すべく「国際観光学研究センター」が大学内に設置される運びとなった。これにより、同センターに配置された国際的に活躍する若手研究員や専門のコーディネーター、さらには世界の観光学研究をリードする海外拠点大学所属の6名の「特別主幹教授」をリーダーとし、観光学部を中心とする本学教員も参画する研究ユニットが構築され、様々な研究プロジェクトが進められつつある。そして、これらの環境整備の結果は、2016、2017年度と2年連続した科学研究費助成採択件数「観光学分野」上位ランキング全国第一位という実績に結実し始めている。

以上に加えて、観光学部が様々な地域・国際連携活動に持続的に取り組んできたことも特筆すべきであろう。和歌山県内および大阪府南部をはじめとする地域・自治体と連携して教員と学生とが地域課題の解決を模索する「地域インターンシップ」、和歌山県庁・県観光連盟との共催による「観光カリスマ講座」、長野県飯田市との友好交流協定に基づく「南信州飯田フィールドスタディ」や「学輪IIDA」活動、大学間連携による観光人材育成の土台となった「関西観光教育コンソーシアム」による事業活動、さらには太平洋アジア観光協会（PATA）や国連世界観光機関（UNWTO）の賛助会員としての国際交流活動や英サリー大学・豪クイーンズランド大学など海外の観光学拠点校との教育研究交流事業がそれであるが、これらの実績は、2017年3月に日本国内では初めての取得となったUNWTOの「TedQual（観光教育・研究の質向上を目指す機関認定）」認証取得の際にも高く評価されているのである。

さて、翻ってこれまでに刊行された『観光学』を紐解いてみると、教員同士あるいは学生との共同によるこれらの地域・国際連携活動を契機とする研究活動も数多く残されている。また近年では、大学院博士後期課程に所属する学生諸氏による研究サーベイ論文の投稿も増える傾向にある。そして何よりも「研究論文・実践論文・研究ノート・判例研究・観光フォーラム・翻訳・書評・作品」など、専門の学術誌にはない多彩な原稿区分の存在そのものが、まさに観光学の学際性を示唆するようである。

最後に、本誌が引き続き「学際的（interdisciplinary）な」内容を備えた日本型の新しい観光学の確立を目指す学兄諸氏の自由闊達な議論の場としての役割を果たすことを祈念して、特集のご挨拶としたい。